ISSN　0910-2396

# 野鳥だより
—北海道—

北海道野鳥だより第200号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　2020年6月21日

## 創立50周年記念号

フクロウ

2018. 5.21　野幌森林公園
撮影者　池　端　耕　治（江別市）

## もくじ

創立50周年会長挨拶　　北海道野鳥愛護会　会長　樋口　孝城 …… 2
祝辞　北海道野鳥愛護会50周年に寄せて
藤巻　裕蔵　　正富　宏之　　小川　　巌 …… 3
北海道野鳥愛護会の歩み
50周年記念号編集担当委員　國本　昌秀 …… 4
年表　北海道野鳥愛護会の歩み …… 6
北海道野鳥愛護会のシンボルマーク
「フクロウ」に決めた時期と理由は？ …… 8
探鳥地50年の変遷　　50周年記念号編集担当委員　樋口　孝城 …… 9
探鳥会　私の思い出
小堀　煌治　戸津高保・以知子　道川富美子　白澤　昌彦 …… 14
佐々木　裕　横山加奈子　栗林　宏三　早坂　泰夫
2020年度総会報告 …… 18
探鳥会ほうこく　探鳥会あんない　鳥民だより …… 20

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ（https://aigokai.org）で閲覧することができます。

### 創立50周年会長挨拶

# 野鳥と関わる喜びを共有して

北海道野鳥愛護会　会長　樋　口　孝　城

創立50周年の時に会長職にあることに、ある種の戸惑いを感じています。自分が会長の時に偶々50周年になったという感覚です。私自身の入会は1995年ですから、ちょうど半分の25周年です。妻と二人、「鳥でも見ようか」と愛護会に入り、周りから見ると多分比較的熱心な会員でした。そのうち、暇な人間と見られたのでしょうか、当時の幹事の方のお一人から声をかけられ、軽い気持ち、お手伝い程度のつもりで幹事を引き受けたのが運の尽きでした。

初めは広報幹事でしたが、現在は会長で、嫌でも会全体のことを考えなくてはならない立場にあります。かつての職場では相当自由に振る舞い、周りから見ると、おそらくかなり我儘な私でしたが、愛護会活動を通して様々な生活背景をもつ方々とお付き合いすることで、少しはまともな高齢者になってきたかもしれません。愛護会に感謝、感謝です。

50年の変遷を顧みると、今の愛護会は設立当初とは大きく違った方向に進んだようです。そもそも北海道庁主導で、野鳥だより創刊号に見る犬飼哲夫初代会長の巻頭言では、「野鳥は人類の文化財」、「野鳥保護は広範な国民運動」、「愛護会は北海道の野鳥愛護運動の推進力」という高邁な思想が述べられています。道庁内に事務局を置き、関係部局の人達の多くは会員になって会の活動に大きな貢献をしました。野鳥関係研究者・教育者はもちろん、地域の自然保護活動家、教育的指導者なども活躍し、啓蒙団体としての存在感を示していたようです。

私が入会した頃、設立から既に25年経っていた時には、既にこの官主導的、啓蒙団体的感じはだいぶ薄れていたような気がします。ある意味難しい社会的思想、方向性思想よりも、自然を楽しむ、野鳥の姿や声を純粋に楽しむというスタイルに変わりつつあった、いや、もう既に変わっていたのかもしれません。私は入会時からそのような状況にいましたから、これを嘆くような気持ちは全くありません。一人ひとりが自分自身の人生の潤いのために野鳥を楽しむことはもちろん、より楽しむために同好団体である愛護会に入り、野鳥を見るだけではなく、同じような気持ちの人達との親睦もできることは素晴らしいことです。現在の愛護会には設立当初とは違う存在意義があります。

個人的には、会は可能な限り緩やかな組織でありたいと思っています。会員にはいろいろな立場の人がいます。いろいろな思想の人がいます。会の方針が会員個人個人の活動を制限することは避けたいと思っています。野鳥およびそれを取り巻く環境へのそれぞれの思いを大切にしながら、野鳥との関わりに喜びを持ち続け、さらにはその喜びを皆で共有することができる愛護会であることを願っています。４年前の会長就任時挨拶で書きましたが、「一歩進んだ同好会、趣味の会」が愛護会の立つ位置として適当なのではと、現在でも思っています。50年という歴史、これから歩む道、どちらも大事なものです。

私のこの拙文が皆様の目に触れる時でも、新型コロナウイルス感染症はまだまだ治まっていないと思います。当会の探鳥会は３月からずっと中止になっています。１日も早く収束し、みんなで野鳥を楽しめるようになることを願っています。

# 祝 辞　北海道野鳥愛護会50周年に寄せて

## ますますの発展を願う

帯広畜産大学名誉教授
**藤巻　裕蔵**

北海道野鳥愛護会は1970年５月に設立されたので、今年の５月で51年目を迎えることになる。鳥関係の民間団体というと、普通は鳥の観察を趣味とする人たちなどが中心になって始まるのだが、愛護会の場合は少し違っていた。会設立の中心は、当時北海道林務部林政課で鳥獣行政を担当していた人たちで、会の事務局もこの課内にあった。また、たよりの発行者も北海道国土緑化推進委員会という道の外郭団体であった。こういった点で、愛護会は官製であったと言ってよい。また、会の発足当初の活動も、会誌の「北海道野鳥だより」は定期的に発行されていたものの、探鳥会などの行事は少なかった。

現在では会員数も多くなり、会も会員から選ばれた役員によって運営されていて、すでに立派に独り立ちした団体となっている。探鳥会も会の中心的な活動となり、四季をとおして行われている。「野鳥だより」は今年の６月で200号となり、内容も探鳥会の記録だけではなく、貴重な観察記録が掲載され、今では記録の保存媒体としても重要になっている。

探鳥会の記録も同じ場所での長期にわたる記録が蓄積してくると、立派な資料となる。例えば、会の30周年記念で2001年に発行された「私たちの探鳥会」を見ると、今ではほとんど見られなくなったシマアオジがこの頃まではまだ健在であったことが分かる。また、私にとっては珍しい鳥や各地の鳥類相の記録が非常にありがたい。多くの会員の目があってこそこのような記録が集まるわけで、これも「野鳥だより」の魅力の一つであろう。本会の会員には道外の人も少なくないようであるが、その理由はおそらくこのような魅力にあると思う。

会員が多くなると、会に対する期待・要望も多様になるであろう。しかし、このことも会を動かす原動力となるはずである。北海道野鳥愛護会の誕生50年を迎え、会の今後のますますの発展を願うものである。

（元日本鳥学会会長・当会顧問）

## 存在意義は極めて大きい

専修大学北海道短大名誉教授
**正富　宏之**

1970年は、その２年前に参加した北大中央ネパール生物調査の鳥担当として、報告作成などに追われた年だ。と同時に、釧路市の博物館から、美唄市の新設短大へ移り、本格的にタンチョウの調査を始めたときでもある。

担当の授業が終わると、ホンダ360で400キロ先の釧路へひた走り、週末は湿原で車中泊を、月曜からはまた美唄で授業を、が日常だった。だから、愛護会実施の探鳥会は、残念ながら一度も参加していない。

しかし、野鳥だよりの「“たんちょう”会ほうこく」に、タンチョウやシマアオジの名がないか、いつも気にしていた。それに、調査の土産話として、北海道初認のカナダヅルの記録を、写真入りで野鳥だよりに載せていただいたりした。

私には付かず離れずの野鳥愛護会だが、全道を対象に野鳥の目撃記録を残し、鳥情報を発信する会の意義は極めて大きい。会を運営し、会誌発行に尽力された方々に感謝するとともに、次の半世紀も愛護会が着実に歩むことを切に願う。

## 創立100年見据えた活動を

エコ･ネットワーク代表
**小川　巌**

会が産声を上げてから50年になりましたか。道庁自然保護課の肝いりで結成され野村梧郎さん、萩千賀さん、百武充さんたちが尽力されました。役所が音頭をとって発足した会とは言え、純然たる民間の団体として成長してきた50年だったと思います。当時、全国各地で野鳥関係の団体が次々と生まれていました。しかし今日まで活動を続けている団体はわずかです。

私は設立メンバーではありませんが、入会したのは20代後半でした。会報がサイズこそ変わったもののほぼ同じスタイルで発行されてきたのは奇跡と言えるでしょう。貴重な記録が毎号のように掲載され、学術的な価値も高まっています。それはそれとして、エッセイや野鳥との交流など楽しめる原稿がもっと増えていけば、より親しみやすい会報として読み継がれていくことでしょう。更に創立100年を見据えた活動と会報作りを期待しています。

# 北海道野鳥愛護会の歩み

50周年記念号編集担当委員　國　本　昌　秀

## 鳥獣行政主導の草創期（70年～）

北海道野鳥愛護会は、1970(昭和45）年５月９日に創立総会が行われ、212名の個人会員と９団体で発足した。きっかけは、その７年前の63年。「狩猟法」が「鳥獣保護及ビ狩猟ニ関スル法律」となったことに遡る。行政の目的が保護と狩猟の両輪で進むことになったのである。68年には北海道猟友会が法人格を得たが、道内には実質的に活動中の野鳥保護団体がなかった。そこで、鳥獣行政を主管する道の林務部が全道規模の野鳥保護団体と指導者を「育成」する方針を固めた。

69年11月、道が野鳥の研究者や愛好家など関係者に呼びかけ、北海道野鳥愛護会設立準備会が設立された。準備会は70年２月に「北海道野鳥だより」１号を発行し、広く入会が呼びかけられ、５月の発足に至った。設立の目的は「野鳥愛護活動の実践と、野鳥知識の普及をはかり、広く有益鳥類保護の運動を振興する」とし、主な活動は探鳥会、講演会・研修会、野鳥だよりの発行など。年額会費は個人300円、団体1,000円であった。

創立総会（1970年5月9日）

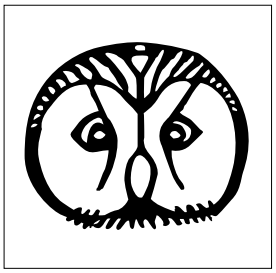
初代会長は動物学者で北大名誉教授、北海道鳥獣審議会委員長の犬飼哲夫氏。第一次南極観測隊で生き残ったカラフト犬タロとジロの育ての親であった。事務所の所在地は道林務部の関係団体である北海道国土緑化推進委員会と規定し、実際の事務局は道林務部林政課猟政係内に置かれた（翌年、道の機構改革で事務局は自然保護課野生鳥獣係内に所管変え）。事務局は野鳥だよりの編集、事務取り扱いなどを担い、道は野鳥だよりの買い上げなどの支援を行った。

行政主導の設立ではあったが、当時の猟政係長で愛護会幹事の安田鎮雄氏は、野鳥だより50号（80年２月発行）で『当事者である私たちは官制など念頭になく保護思想の普及と、保護運動を第一義として取り組んだ。さしあたりは野鳥への認識を高めることが先決、保護運動はその中から育てようということで「愛護会」とした』と記述している。運営の柱となった道職員を含めた野鳥を愛する「当事者」による自由な取り組みがなされたことを物語っている。

## 運営の一大転換期（77年～）

77年４月、これまで道に依存してきた会の運営を自立化する方向性が示され、幹事会の職務分担も、総務、企画、広報、探鳥、会計と明確にされた。事務局は設立時に所在地と規定された北海道国土緑化推進委員会内に移転、79年６月には、北海道自然保護協会内に再移転した。背景の一端には、このころ道内でも活動が盛んになってきた日本野鳥の会の存在があった。道の中には愛護会を発展的に解消し、向き合う保護団体を日本野鳥の会にという意向もあった。協議を経て、これまでの歩みを尊重する愛護会は自主運営を選択し、道も従来通りに野鳥だよりを買い上げる支援を継続した。発行・北海道国土緑化推進委員会、編集・北海道野鳥愛護会であった野鳥だよりも、36号（79年7月発行）から編集・発行とも北海道野鳥愛護会となり、体制の変化を象徴した。設立から9年、行政主導で産声をあげた愛護会は大きな転換期に入っていく。

80年４月に第２代会長に北海道栄養短大教授だった井上元則氏が就任。森林昆虫の権威で野鳥研究にも造詣が深く、昭和17年に十勝三俣でミユビゲラを発見したことでも知られている。12月には、会員でのちに第５代会長になる谷口一芳氏がデザインした愛護会のシンボルマーク「フクロウ」のネクタイピンとタイタックが製作・販売された。



会のシンボルマーク
フクロウ

第２代会長　井上元則氏

83年８月に、これまでの愛護会の活動が評価されて、第一回前田一歩園賞を受賞した。84年４月には、野鳥愛好家で、創立時に監事として参画の元北海道電力監査役・苣野寿衛吉氏が第３代会長に就任した。83年から85年にかけて役員・幹事の世代交代が図られ、年１回総会直前に開かれていた役員・幹事会も毎月開催されるようになった。

87年４月に、札幌市立三里塚小学校長の柳沢信雄氏が第４代会長に就任した。88年には、これまでの探鳥会の記録をまとめた「私たちの探鳥会～探鳥会17年の記録～」が刊

行された。この当時の探鳥会は年間11地域17回で、10年以上継続している野幌森林公園、鵡川河口、ウトナイ湖、植苗、福移、小樽港、藤の沢の７ケ所の記録が綴られた。

私たちの探鳥会
探鳥会17年の記録

第４代会長　柳沢信雄氏

行政からの自立で、運営に不安も感じていた愛護会にとって励みになったのが、前述の前田一歩園賞の受賞と、この「私たちの探鳥会」の刊行であった。前田一歩園賞の表彰金は、85年５月開催の「全国野鳥保護の集い」に向けて、会員撮影の写真はがき「北海道の珍鳥」(12種400円)の製作に活用され、会員には、事前に無料配布された。「私たちの探鳥会」の製作は、亡くなった創立時からの幹事２名の遺族から寄せられた寄付金がきっかけとなった。故人と遺族の気持ちに応えるために、「会員に出来ることは何か」と議論がなされた。

柳沢会長は創立20年にあたる野鳥だより80号（90年7月発行）で、『これらが会の活動に安定性をつくりだしてくれた。官主導から脱皮し波乱を超えてようやく軌道に乗れた節であった』と述懐している。

## 今日に至る基盤の構築期（91年～）

91年10月に92年版カレンダーを会員の写真で初製作、93年には発足時から続いてきた「新年懇談会」が「新年野鳥講演会」と改められ、会員に加えて幅広い野鳥ファンに門戸が開かれた。94年には、設立時から４回目になる会費の値上げがあり、個人会員2,000円、団体5,000円となった。会費は今日に至るまで26年間据え置かれている。創立25年の95年には初の海外企画として香港探鳥ツアーが行われた。96年には個人会員のほかに一家族3,000円の家族会員制度が新設され、これも据え置かれている。

98年３月に会長の柳沢信雄氏が亡くなった。在任11年間、野幌森林公園を守る会会長、北海道自然保護協会理事など幅広い活動の中で、今日に至る愛護会の基盤を築いた。没後、その野鳥愛護と保護実践活動に対して、北海道社会貢献賞（知事表彰）が贈られた。第５代会長に就任したのは元道職員で、当会のフクロウマークをデザインした谷口一芳氏。野鳥の生命を謳いあげる作風で知られる春陽会会員の洋画家であった。

2000年７月には創立30周年記念サロベツ原野・ベニヤ原生花園宿泊探鳥会が開催された。これまで、単発的に宿泊を伴う探鳥会は行われてきたが、これを機に毎年夏に一泊

創立30周年記念
サロベツ原野・ベニヤ原生花園
宿泊探鳥会

私たちの探鳥会
探鳥会30年の記録

二日の探鳥会が開催されるようになった。30周年記念誌「私たちの探鳥会～探鳥会30年の記録～」(01年６月発行)は、12地域、年間20回の定例探鳥会で蓄積されたデータがまとめられた。まさに「継続は力」の30年間であった。

## 持続的な運営期（01年～）

01年８月にホームページが開設され、活動記録や広報もデジタル化された。02年４月、第６代会長に北海道新聞社勤務の小堀煌治氏が就任。幼少のころから野鳥ファンであった小堀氏は創立期からのメンバーで、会長を16年３月まで14年間務めた。この間、愛護会は創立40年にあたる10年５月の第64回愛鳥週間「全国野鳥保護の集い」で、環境省自然環境局長賞を受賞している。

ここで、愛護会の会員数の推移をみると、ピークは77年度の個人517人・団体５の合計522人。その後、会員数は緩やかに減りながらも、安定的に400人台で推移してきた。しかし、08年度に個人286人、33家族86人、団体２の合計374人と400人台を初めて割り込み、10年度には350人となった。会員の高齢化に伴う退会が主な要因で、収入減にともなって年間予算も08年度の120万円から10年度は91万円となる。2011年４月の総会で会員増を目的とした「探鳥会のあり方と幹事の対応について」が決議され、即日実行された。新聞などを見て探鳥会に来た初参加者や非会員に、会の腕章をした幹事が鳥をわかりやすく説明するなど、きめ細かな対応と勧誘の方針が決められた。特に成果をもたらしたのは、「入会案内」の三点セットであった。野鳥だよりのバックナンバー、探鳥会予定表、切手付き入会案内ハガキが手渡された。入会者によると二度、三度と渡されたことが入会に結びついたという。14年にはホームページに入会フォームがつくられ会員確保の一翼を担っている。会の原点である「探鳥会」のあり方を見つめなおしたことで、会員は毎年、微増の傾向に転じた。

2016年４月に元北海道医療大学教授、石狩鳥類研究会代表の樋口孝城氏が第７代会長に就任した。樋口氏は愛護会の位置づけを多様な背景を持つ会員が、野鳥観察という共通のテーマで集い、思想や立場を超えて親睦できる「一歩進んだ同好会・趣味の会」とした。2020年４月１日の会員は個人252人、60家族135人、団体１の総計388人となっている。

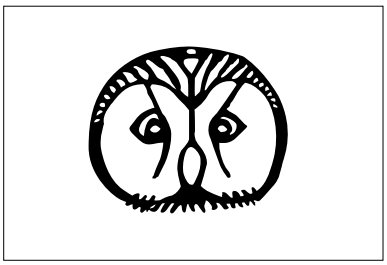
# 年表　北海道野鳥愛護会の歩み

| 年 | 月／日 | 出　来　事 |
|---|---|---|
| 1970年（昭和45年） | 2/10 | 北海道野鳥愛護会設立準備委員会が野鳥だより第１号を発刊 |
| | 5/9 | 北海道野鳥愛護会創立総会を開催し、初代会長は犬飼哲夫氏（北大名誉教授）。所在地を道の関係団体である北海道国土緑化推進委員会内とし、事務局を道の林務部林政課猟政係に置く |
| | 5/10 | 第１回探鳥会を野幌森林公園で開催し、バス２台借り上げて120名が参加 |
| 1971年（昭和46年） | 1/23 | 第１回新年懇談会でスライド上映などを行い、以降毎年開催 |
| | 8/1 | 道の機構改革に伴い、事務局を新設された自然保護課野生鳥獣係に所管変え |
| 1972年（昭和47年） | 2/20 | 南区藤の沢・小沢広記氏宅の給餌台に来る野鳥の観察会を開催し、75年以降は１月恒例の探鳥会になる |
| 1975年（昭和50年） | 2/16 | 野幌森林公園でスキー探鳥会を行い、冬の恒例探鳥会になる |
| 1977年（昭和52年） | 4/1 | 事務局を北海道国土緑化推進委員会内に移転 |
| 1979年（昭和54年） | 6/6－18 | 会員撮影による第１回の野鳥写真展を三菱信託銀行札幌支店で開催し、以降毎年、主にバードウィークの期間に開催 |
| | 6/11 | 会務を行政から離す体制に転換し、事務局を北海道自然保護協会内に移転 |
| 1980年（昭和55年） | 4/19 | 第２代会長に井上元則氏（元北海道栄養短大教授）が就任 |
| 1981年（昭和56年） | 12/－ | 本会のシンボルマーク「フクロウ」のネクタイピンとタイタックを製作し販売 |
| 1983年（昭和58年） | 2/21 | 野鳥だより「第50号記念」特集号を発行 |
| | 8/30 | 第１回「前田一歩園賞」を受賞し、釧路支庁で表彰式 |
| | 10/23 | 探鳥会参加者に対する傷害保険の契約締結し、以後継続 |
| 1984年（昭和59年） | 4/21 | 第３代会長に苣野寿衛吉氏（元北海道電力監査役）が就任 |
| | 12/21 | 翌年の「全国野鳥保護の集い」に向けて、写真はがき「北海道の珍鳥」（12種400円）を製作し、会員には無料で送付 |
| 1985年（昭和60年） | 3/21 | 国立国会図書館から1SSNナンバー（国際標準逐次刊行物番号）の割り当てがあり、野鳥だより59号より表記して発行 |
| | 5/12 | 「全国野鳥保護の集い」（野幌森林公園）の開催に協力 |
| 1987年（昭和62年） | 4/18 | 第４代会長に柳沢信雄氏（札幌市立三里塚小学校長）が就任 |
| 1988年（昭和63年） | 6/21 | 亡くなった幹事２名の遺族からの寄付金で「私たちの探鳥会～探鳥会17年の記録～」を刊行 |
| 1990年（平成２年） | 7/21 | 20周年記念号として「野鳥だより」第80号を発行 |
| | 9/21 | 20周年記念として、「フクロウ」のネクタイピンとタイタックを製作し販売 |
| 1991年（平成３年） | 10/－ | 1992年（平成４年）版カレンダーを会員の写真で初製作し販売 |
| 1993年（平成５年） | 1/9 | 新年懇談会を新年野鳥講演会と改め、石川信夫氏（北方鳥類研究所）が講演 |
| 1994年（平成６年） | 4/1 | 会費を４回目の改定で、現行の個人2,000円、団体5,000円に |
| 1995年（平成７年） | 1/22 | 25周年記念「藤の沢・白鳥園」探鳥とスライド映写会を開催 |
| | 2/23－26 | 25周年記念「香港探鳥ツアー」 |
| | 5/20 | 専修大学北海道短大正富宏之教授を講師に25周年記念「野鳥講演会」を開催 |

| 年 | 月／日 | 出　来　事 |
|---|---|---|
| 1996年（平成８年） | 4/1 | 個人会員のほかに家族会員制度（１家族3,000円）を新設 |
| | 4/28－29 | 糠平温泉で探鳥会「キンメフクロウの声を聞く会」　参加31名 |
| 1998年（平成10年） | 3/29 | 第４代会長柳沢信雄氏死去 |
| | 4/15 | 第５代会長に谷口一芳氏（洋画家）が就任 |
| | 5/9 | 1984年から続く千歳川一泊探鳥会の宿泊を終了し、早朝探鳥会として実施 |
| 2000年（平成12年） | 1/16 | 南区藤の沢「白鳥園冬の探鳥会」を終了、「春の藤の沢小鳥の村」探鳥会を5/5に開催して、以降継続 |
| | 7/1－2 | 30周年記念「サロベツ原野・ベニヤ原生花園」宿泊探鳥会を開催　参加49名 |
| | 9/21 | 野鳥だよりを121号から、Ｂ５版からＡ４版に変更 |
| 2001年（平成13年） | 6/21 | 30周年記念誌「私たちの探鳥会～探鳥会30年の記録～」を刊行 |
| | 6/30－7/1 | 旭岳温泉周辺で宿泊探鳥会　参加45名 |
| | 8/1 | ホームページを開設 |
| 2002年（平成14年） | 4/13 | 第６代会長に小堀煌治氏（北海道新聞社勤務）が就任 |
| | 8/31－9/1 | コムケ湖等で宿泊探鳥会　参加44名 |
| 2003年（平成15年） | 6/7－8 | 大沼公園等で宿泊探鳥会　参加46名 |
| 2004年（平成16年） | 6/4－6 | 春国岱・野付半島で宿泊探鳥会　参加45名 |
| 2005年（平成17年） | 6/4－5 | 富良野・東大演習林、白金温泉等で宿泊探鳥会　参加53名 |
| 2006年（平成18年） | 5/2－5 | 利尻島・礼文島で宿泊探鳥会　参加45名 |
| 2007年（平成19年） | 4/8 | モエレ沼で初の探鳥会 |
| | 5/3－5 | 天売島・焼尻島で宿泊探鳥会　参加44名 |
| | 8/19 | 石狩川河口で初の探鳥会 |
| 2008年（平成20年） | 5/10－11 | 十勝方面で宿泊探鳥会　参加45名 |
| 2009年（平成21年） | 7/4－5 | サロベツ原野・ベニヤ原生花園で宿泊探鳥会　参加43名 |
| 2010年（平成22年） | 5/16 | 40年間の活動が評価され、第64回愛鳥週間全国野鳥保護のつどいで、環境省自然環境局長表彰を受賞 |
| | 7/3－4 | 旭岳で宿泊探鳥会　参加48名 |
| 2011年（平成23年） | 4/11 | 会員増を目的に「探鳥会のあり方と幹事の対応」方針を総会決議 |
| | 6/12 | 東米里探鳥会に替えて、厚別川探鳥会に |
| | 7/2－3 | 根室で宿泊探鳥会　参加44名 |
| 2012年（平成24年） | 5/18－20 | 利尻島で宿泊探鳥会　参加45名 |
| | 6/2 | ヒグマ出没により、平和の滝薄暮探鳥会を終了 |
| 2013年（平成25年） | 5/3－5 | 天売島・焼尻島で宿泊探鳥会　参加45名 |
| | 6/1 | 野幌森林公園で夜の探鳥会　2015年までこの時期に実施 |
| | 6/1 | ホームページのURLを移転し、「野鳥だより」のバックナンバーを公開 |
| | 9/15 | ９月の石狩川河口探鳥会に替えて、いしかり調整池探鳥会に |
| 2014年（平成26年） | 5/10－11 | 十勝で宿泊探鳥会　参加46名 |
| 2015年（平成27年） | 6/13－14 | サロベツ原野で宿泊探鳥会　参加45名 |
| 2016年（平成28年） | 4/13 | 第７代会長に樋口孝城氏（元北海道医療大学教授）が就任 |
| | 5/29 | 野幌森林公園で、初の早朝探鳥会 |
| | 7/2－3 | 旭岳で宿泊探鳥会　参加42名 |

| 年 | 月／日 | 出　来　事 |
|---|---|---|
| 2017年（平成29年） | 10/21－23 | 十勝で宿泊探鳥会　参加43名 |
| 2018年（平成30年） | 4/1 | いしかり調整池環境保全の確認書を石狩土地改良区と調印 |
| | 9/1－2 | 網走などオホーツクで宿泊探鳥会　参加41名 |
| 2019年（令和元年） | 5/17－19 | 礼文島で宿泊探鳥会　参加37名 |
| | 6/30 | ヒグマ出没で野幌森林公園の探鳥会中止（7/14も） |
| | 10/20 | 室蘭の測量山（唐松平）でタカの渡りを見る探鳥会を試行 |
| | 12/19 | フェイスブックページでの広報を試験的に開始 |
| 2020年（令和２年） | 3/1 | 新型コロナウィルス感染症拡大防止のため円山公園探鳥会を中止<br>３月から６月までの探鳥会もすべて中止 |
| | 6/21 | 創立50周年記念号「野鳥だより」発行 |

# 北海道野鳥愛護会のシンボルマーク
## 「フクロウ」に決めた時期と理由は?



北海道野鳥愛護会のシンボルマーク「フクロウ」は、いつ、いかなる理由で決められたのだろうか。今回、50年史をまとめるにあたって調べたところ、当会に明確な記録はなく、古くからの会員に聞いても「わからない」と首をかしげるのである。

初めてフクロウマークが登場したのは、事務局が道庁内から北海道自然保護協会内に移転した直後、79年７月発行の「野鳥だより」36号の目次カットであった。この時の表紙写真もフクロウで、撮影場所は当会のホームグラウンドと言える探鳥地・野幌森林公園であった。撮影したのは村野紀雄氏。会員で、道の自然保護課職員として野鳥だよりの編集に携わっていた。

村野氏は「野鳥だよりに使うカットを洋画家の谷口一芳氏（のちに第５代会長）に依頼し、フクロウも描いて頂いたが、課内でシンボル制定の議論があったという記憶はない」という。「野鳥だより」50号（83年２月発行）の年表には、81年12月に「エゾフクロウ」は当会のシンボルマークであるとして、そのネクタイピンとタイタックを製作・販売したことが記されている。しかし、シンボルマークになった時期や理由についての記述は、それ以前の会報にも見当たらない。村野氏は、「ネクタイピンなどは、会の運営費に充てようということであったかもしれない」と記憶を手繰り寄せる。

以下はフクロウが当会のシンボルとなったいきさつの推論である。時期としては、79年７月に登場した目次カットが、81年12月までに、運営費調達の目途もあって、シンボルマークに“進化”した。なぜフクロウかというと、当会のホームグラウンドの野幌森林公園の代表的な野鳥であること。きっかけとなった目次カットをデザインした谷口氏が、ことのほかフクロウを慈しみ、生涯のテーマとしていたこと。谷口氏は創立30年に刊行した記念誌「私たちの探鳥会～探鳥会30年の記録～」で、「シンボルマークに知の神フクロウをデザインさせて頂いたことは、私の喜びの一つです」と述懐している。79年から81年というのは、道庁主導の運営から愛護会が自立していく時期と符合する。知の神というシンボルを立てて、前に踏み出す気運も高まっていたことだろう。

制定の時期と理由は推論の域を出ないが、ネクタイピンなどの製作・販売以降、フクロウは確実にシンボルとしての位置を確立していく。83年２月発行の50号という節目の「野鳥だより」の表紙写真は、カラーで野幌森林公園のフクロウであった。また、88年に刊行された「私たちの探鳥会～探鳥会17年の記録～」の表紙もフクロウのカラー写真、そしてフクロウのシンボルマークが発行者である北海道野鳥愛護会という文字に寄り添っている。

（國本昌秀）

# 探鳥地50年の変遷

50周年記念号編集担当委員　樋　口　孝　城

毎年ほぼ同じ場所および時期に開催されている探鳥会を「定例探鳥会」とします。2019年度は14ヶ所、26回の予定でした。ここでは、その定例探鳥会について、過去からの変遷および現状を概括してみます。

図１は1970年の愛護会設立以来、定例的に行われてきた探鳥会の2019年までの継続状況を示すものです。設立の年に野幌森林公園で最初の探鳥会が行われ、その後、年毎に探鳥地が増えてきましたが、特に初めの10年以内に、毎年のように新しい場所が加わっています。この間、他に藻岩山、石狩川河口、大雪山愛山渓・十勝岳などでも探鳥会が行われましたが、それらは１、２回（１、２年）の試みだけで、定例的なものには至りませんでした。その後、さらに新しい探鳥地が加わったり、開催されなくなったりして現在に至っています。

以下、図１の場所のそれぞれにつき、開催に至った経緯、現在までの状況などを説明します。

**【野幌森林公園】**

記念すべき第１回探鳥会が開催されたのは1970年５月10日です（写真１）。その２年前の北海道開基百年を記念して道立自然公園に指定されましたが、開基以来、「野幌原始林」、「野幌国有林」として極めて重要な場所であり続けたこの場所が最初の探鳥会の場所として選ばれたことについては、その経緯などを記すまでもないと思われます。

この年には10月にも行われ、その後は２月、４月にも行われるようになりました。これだけですと、年に４回しか開催されていないようにみえるのですが、設立の年から「野幌森林公園を歩きましょう」（以下「歩きましょう」）という、ほぼ探鳥会と同様の会が毎月のように、しかも時には月に２回行われていました。

写真１．第１回探鳥会風景（野幌森林公園）　野鳥だより第４号（1970）より

「歩きましょう」は、公園のすぐ近くにお住まいで、会設立時のメンバーである百武充さん（当時、道庁勤務）の呼びかけによる行事で、「私設・野幌森林公園探鳥散歩」でしたが、実際にはその案内が「野鳥だより」に掲載され、参加者も多く、通常の探鳥会と同様でした。参加者は

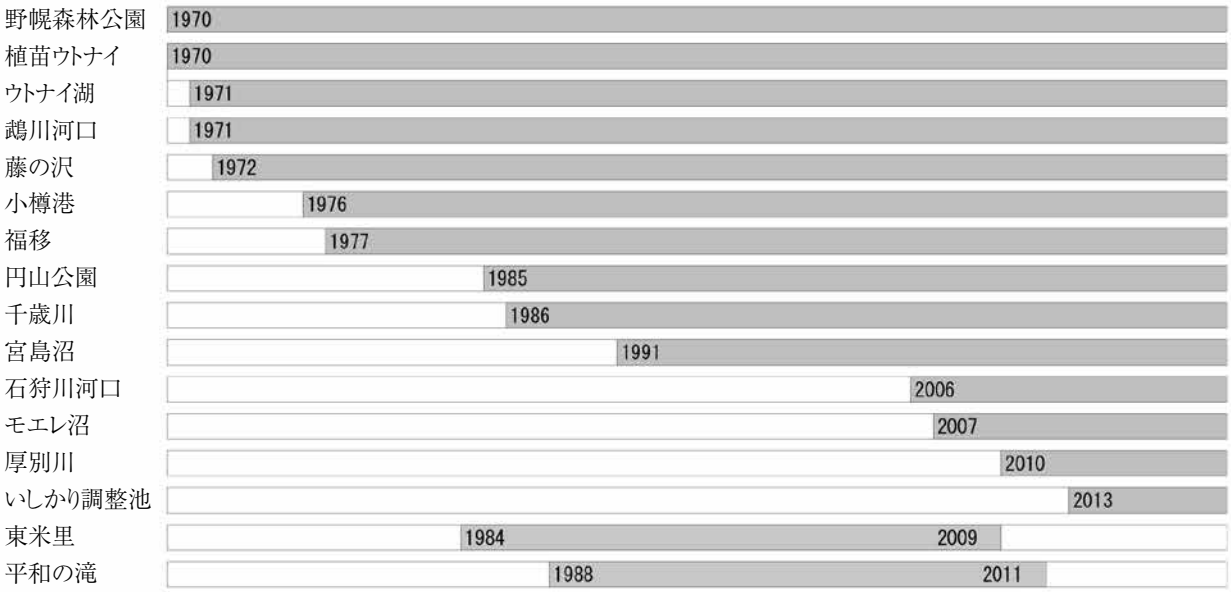



図１．定例探鳥会の開始年と終了年（東米里、平和の滝）

「探鳥会」も「歩きましょう」も区別していなかったようです。ただ、大きな違い、そして今となってはとても残念なことですが、会としての正式な探鳥会ではなかったので、「記録された鳥」が当時の参加者の個人記録として一部は残されているかもしれませんが、会の記録としては「野鳥だより」に残されなかったことです。

この「歩きましょう」は第４代会長の柳沢信雄氏によって受け継がれ、2003年からは正式な探鳥会になりました。その結果、１月、３月、８月を除いて毎月探鳥会が開催されることになり、現在にまで続いています。基本的には５月には２回で、年間10回です。５月の２回のうちの１回は過去には「夜の探鳥会」にあてられたこともありましたが（後述「平和の滝」の項参照）、現在では「早朝探鳥会」になっています。

なお、1996年と1997年にはそれぞれ５月10日(金)と５月15日(木)に「平日探鳥会」が試みられましたが、担当幹事を除いてどちらも10名に満たない参加者であったため、定常的なものには至りませんでした。

野幌森林公園以外の他の探鳥地での年間複数回開催は、鵡川河口やウトナイ湖での年２回というのがあるだけです。歴史的経緯、公園の野鳥環境重要性などの視点から、野幌森林公園は過去から現在まで、そして将来的にも愛護会の本拠地として位置付けられています。

**【植苗ウトナイ】**

愛護会設立後、第２回が藻岩山、そして第３回が「ウトナイ湖畔」でした。JR（当時は国鉄）植苗駅からウトナイ湖畔に至る道筋と周辺湿地、およびウトナイ湖北東部での探鳥であったことから、現在の植苗ウトナイ探鳥会の始まりとします。

ウトナイ湖と言えば現在では湖の水鳥が連想されますが、周辺の湿地、草原、灌木林は、シマアオジを始めとする夏鳥たちの採餌、休息、営巣のためにずっと前から非常に重要な存在でした。初期においては、たとえば札幌からですと朝７時過ぎの苫小牧行の列車で植苗駅に着いてから探鳥開始となりましたが、最初の探鳥会には40名ほどの参加者があったそうです。次項では「ウトナイ湖」について書きますが、同じウトナイでも、当時はこちらの植苗ウトナイの方が重視されていたのかもしれません。

この探鳥会は６月初旬から中旬にかけて行われています。これは最初から、繁殖期の鳥の雄のさえずりを聞いたり、種類によってはとても綺麗な雄の夏羽を見たりすることが目的だったからです。夏鳥を楽しむ５－６月、森林性の鳥は野幌森林公園で、草原性の鳥は植苗ウトナイでというのがまず提案、確立されたようです。

さて、植苗ウトナイと言えばシマアオジが象徴的な鳥でした。参加者の多くがシマアオジに会うためにわざわざ遠くから来たと言っても過言ではない状況でした。ウトナイ湖が見えてくる灌木草原に近づいてくると、あの美しいシマアオジの声が聞こえてきたものです。そのシマアオジが記録された最後の年が2002年でした。誰もこれが最後の年とは思っていませんでした。

シマアオジがいなくなったのはここだけのことではありません。それから20年近く経ちましたが、植苗ウトナイ探鳥会はずっと続いています。もしかしたら戻ってくるのを待ちわびているのかもしれません。

写真2. 植苗ウトナイで2002年が最後になったシマアオジ

**【ウトナイ湖】**

初めての探鳥会が行われたのは愛護会設立翌年の1971年３月28日です。現在の野生鳥獣保護センターのあたりにあったウトナイ観光ホテルのところから湖岸北側一帯の探鳥でした。ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターもまだなく、岸辺の遊歩道もありませんでした。

当時、ウトナイ湖はガン、ハクチョウ、カモ類の渡りの地として、既に多くの研究者、調査者、バードウォッチャーが訪れ、日本でも有数の野鳥の宝庫として有名でした。水鳥の他にも何種類もの冬鳥、旅鳥が見られました。

初めの頃は探鳥会開催は不定期でしたが、1978年からは３月（春の渡り）と11月（秋の渡り）の定期的なものになりました。日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターがオープンしたのは1981年５月10日で、その年の秋、11月15日の探鳥会では、早速センターまで行き、新しい建物や設備を利用しました。

かつて遊園地、ホテルがあり、岸辺近くまで自家用車が入っていたところは、今や野生鳥獣保護センターと道の駅になっています。すっかり様変わりしました。でも、春秋には湖の鳥を見る観光客などでの賑わいは今も同じです。湖の鳥たちに何か変化が起こっているでしょうか。探鳥会記録の分析により、何かがわかってくるかもしれません。

**【鵡川河口】**

春秋の渡りの時期のシギ・チドリ類や、草原性の鳥などの観察地として知られていた鵡川河口で探鳥会が初めて行われたのは、愛護会創立翌年の1971年９月15日でした。翌1972年秋の雨天中止がありましたが、ちょっと間を置いて1975年からは、基本的に８月と９月の秋２回、そして1991年からは春５月も加わり、年に３回の開催となりました。

1970年頃、シギ・チドリといえば鵡川河口干潟と言われるほどで、会員の多くが在住する札幌市とその近隣からはやや遠かったのですが、人気は高く、探鳥会以外でも熱心に「鵡川通い」をする人が少なからずおりました。右岸に点在していた潟湖では、１回の探鳥会で10種類以上のシギ・チドリが記録されるのは普通のことで、多い時には20種類近くにもなりました。

ところが、その頃からわずか20年ぐらいの間に海岸線は400mほども後退し、河口干潟の90％以上もが海に没してしまいました。図２は1970年頃と2020年頃の鵡川河口の空撮図です。シギ・チドリが利用していた場所は今や完全に海の中です。岸近くに人工干潟が造設されたのですが、かつての賑わいは戻らず、１回の探鳥会で記録されるのは平均して、かつてに比べてずっと少ない５種類足らず、時には１種類も見られないこともあるようになってしまいました。こんなことから、探鳥会開催の見直しがかかり、秋は８月だけになりました。その代わりとして石狩川河口探鳥会が行われるようになりましたが、これについては石狩川河口の項で書きます。

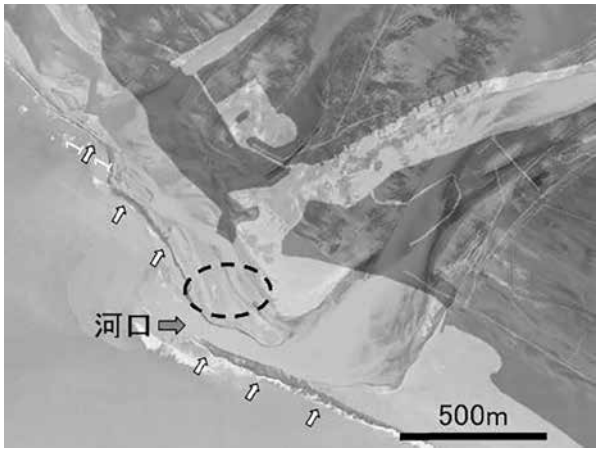



図２．1970年以前と2000年頃の海岸線．1970年以前：いくつかの小さな矢印で示される黒線部分．2000年頃：濃い陸地部分の縁．現在の河口は1970年の河口の部分（矢印）より400mほども後退している．点線楕円部は、かつて多くのシギ・チドリが見られたおよその場所を示す．

**【藤の沢】**

「小鳥の村」として知られる藤の沢小学校（札幌市南区藤野）の愛鳥教育活動を指導されてこられ、愛護会設立発起人の一人である故小沢広記氏の敷地の一部である白鳥園（観察舎、禽舎、池など）は、地域の探鳥会や自然散策等に開放されていました。愛護会設立２年後の冬２月20日、その白鳥園で最初の探鳥会が行われました。園にある建物の中から窓ガラス越しに、庭の餌台に来る鳥達を見るスタイルでした。その数年後からは１月開催となり、建物内で鳥を見ながら、小沢夫人手造りの豚汁を食べるのが恒例でした。

諸般の事情により2000年からは５月初めの開催となり、探鳥コースも白鳥園東側の山道になりました。カラ類などの留鳥や渡ってきた夏鳥たちの繁殖活動が始まっている時期ですから、鳥たちのさえずりが賑やかです。初めのうちは愛鳥広場経由で、通称藤野マナスルに向かう道でしたが、のちには藤の沢小学校に至る山道になり、藤の沢小学校で小休止の後、一般道に沿った遊歩道を通って白鳥園に戻るコースになり、現在に至っています。

**【小樽港】**

初めての探鳥会は1976年12月12日でした。海鳥を見るのはやはり冬です。今と全く違うのは「海上探鳥会」であったことです。日本野鳥の会小樽支部との共催で、JR（当時は国鉄）小樽駅に集合した後、小樽港第三埠頭に移動、当時あった共同通船の船をチャーターして海に出て、およそ１時間半かけて港内をくまなく回りました。

船に乗っての「海上探鳥会」は人気があったのですが、天候に大きく左右されることもあり、数年後には小樽駅集合、貸し切りバスでの「海岸探鳥会」になりました。その代わり、探鳥場所は祝津～小樽の広い範囲となり、現在とほぼ同じコースになりました。

12月開催、小樽駅に集合、日本野鳥の会小樽支部と合同というスタイルは1998年までで、1999年をとばし、2000年からは１月開催、そして2007年からは愛護会単独で、札幌から貸し切りバス利用という現在の形になっています。参加者全員が同じバスに乗り、懇親を深めながらの探鳥会は宿泊探鳥会を除いては今やここだけです。思うように天候に恵まれないこともありますが、大事にしたい探鳥会です。

**【福　移】**

札幌市の北端部近くに位置し、探鳥会参加者は石狩川左岸堤防道路上を歩きながら、河川敷や外側の畑地・草原の鳥を見ます。

初めての探鳥会は1977年７月３日でした。以後毎年、夏鳥たちの繁殖後期にあたる６月下旬～７月初旬開催です。探鳥会が行われるようになった頃は、集合は最寄りのバス停集合でしたが、その後、今はもうなくなってしまった中沼青少年キャンプ場や、貸農園隣接の空き地などに集合場所が移り、現在では札幌市立福移小中学校玄関前になっています。

探鳥コースは現在でも「ここが札幌市なのか」と思われるほどの環境なのですが、鳥たちの出現状況はやはり以前に比べて変わってきています。1990年代までは、ウズラ、アカモズ、マキノセンニュウ、シマアオジが普通に近く見られていましたが、今ではほとんど望み薄です。それでも初夏の日差しを浴び、カッコウの声を聞きながら石狩川の土手道を歩く楽しみはこれからも続くはずです。

**【東米里→厚別川】**

札幌市白石区東米里は草原性を中心とした野鳥が生息し、1984年６月に初めての探鳥会が行われました。集合場

所である東米里小中学校から厚別川までは市街化調整区域で、草原、林、空き地、家庭菜園などが適度に存在し、野鳥たちにさまざまな環境を提供していました。オオジシギ、カッコウはもちろん、シマアオジが見られることもありました。

しかしながら、次第に土地利用が進み始め、資材置き場、工場、倉庫、産廃物処分場などが次々にできてきて、野鳥のための環境は悪化していきました。2010年に米里小中学校が閉鎖されたことから、翌2011年からは厚別川近くにある川下公園駐車場を集合場所とし、厚別川堤防上を歩くコースになりました。川下公園のところから左岸堤防道路を２kmほど行き、折り返して右岸を歩いて公園に戻ります。堤防外側法面および内側河川敷、そして上空、遠方の鳥を見ることになります。下流左岸外側の一部は東米里と重なります。

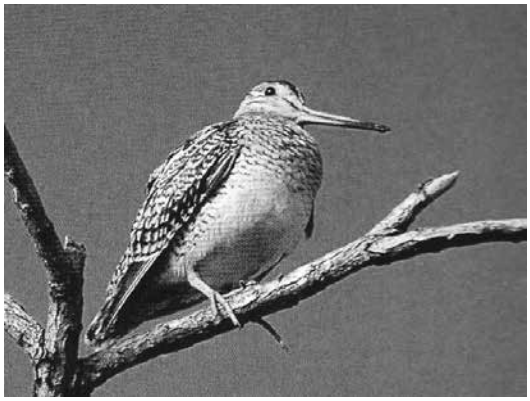


写真3. かつて東米里でしばしば見られたオオジシギ

**【円山公園】**

初めての探鳥会が開催されたのは設立後15年たった1985年です。円山公園は隣接する北海道神宮や円山動物園、そして天然記念物に指定されている円山原始林とともに、札幌市民および道民のレクリエーションの場になっているのですが、愛護会は野幌森林公園を本拠地として毎月のように探鳥会を行っていましたから、類似の環境である円山公園での探鳥会開催気運が遅れたようです。また、日本野鳥の会札幌支部が毎月定例探鳥会を開催しているので、愛護会探鳥会は毎年３月の１回だけです。開催日の積雪量によりますが、コースは毎年ほぼ同じで、春早い時期のカラ類などの留鳥および冬鳥を楽しんでいます。

**【千歳川】**

この探鳥会の始まりである「千歳川周辺の一泊早朝探鳥会」が行われたのは1984年５月のことです。千歳市街から支笏湖に行く支笏湖公園線（道道16号）の烏柵舞（うさくまい）橋に近いところにあったジンギスカン料理店に寝袋持参で19時に集合、ジンギスカンパーティーで22時ぐらいまで歓談後に大部屋で就寝、翌日早朝４時に探鳥開始でした。

宿所から林道を通って道道に出た後、烏柵舞橋の手前から、現在の集合場所である河畔園地に行き、小休止後さらに千歳川沿いを歩き、終了が９時近くでした。

その後、1992年に宿所が支笏湖ユースホステルに代わり、早朝にマイクロバスで河畔園地に移動という形になりましたが、一泊するのは幹事などにかなりの負担がかかることから、1999年からは前泊はせずに、早朝に河畔園地集合ということになりました。

集合時刻が最初は５時でしたが、現在では８時です。王子製紙千歳第四ダムまで行き、そこで昼食をとります。前泊して早朝4時から９時ぐらいまでの探鳥だった時代とは随分と変わりました。夏鳥のさえずりなどが楽しめる繁殖期の探鳥は夜明け前後が最も良いのですが、今の時代、それはなかなか難しいかもしれません。

**【宮島沼】**

マガンの飛来地として全国的に有名な宮島沼での探鳥会が始まったのは現在の感覚では意外と遅く、1991年からです。この年から春は４月、秋は10月の飛来最盛期に定期的に行われるようになりました。

現在ではほとんど信じられないことですが、かつて宮島沼は鳥獣保護区ではなく、狩猟者にとっては絶好の猟場でした。そのため、マガンやハクチョウが沼に放置された散弾銃を飲み込んでの急性鉛中毒が起こり、大きな社会問題になったこともありました。探鳥地と狩猟場というのは両立困難、さらに近隣畑地の食害問題も重なって、狩猟の自粛から実質的禁猟となった1989年を過ぎてから宮島沼探鳥会が行われるようになりました。

宮島沼がラムサール条約湿地に登録されたのは2002年のことです。多くの関係者の方々の苦労が報われました。宮島沼水鳥・湿地センターの建設、駐車場の整備などがあり、観光の方々も多く訪れるようになりました。探鳥会参加者が狭い突堤から一般の方々と一緒に水鳥を見ますから、時にはかなり込み合いますが、沼と近隣の田畑間の上空を飛ぶマガンの群れを見るには問題ありません。

探鳥会は午前10時から正午近くまでですが、愛護会会員の中には前日の夕方にマガンが一斉に沼に戻ってくる光景を楽しみ、近くにある温泉ホテルなどで宿泊、探鳥会当日には早朝に一斉飛び立ちを見て、探鳥会自体は付け足しという人もいます。

**【石狩川河口】**

愛護会設立後の第４回探鳥会は1970年９月で、石狩川河口でした。当時は現在の石狩灯台があるところの石狩川に大きな干潟ができたり、石狩川河口部右岸の陸地に潟湖があったりして、現在との比較においては多くのシギ・チドリが飛来しました。しかし、探鳥会はこの１回だけでした。今では想像もできないことですが、当時の河口部環境は著しく悪く、汚水の滞留、ゴミの蓄積などで目をそむけるばかりだったようで、探鳥会を開く気持ちにはなれなかったのかもしれず、シギ・チドリの観察は鵡川河口とい

うのが流れでした。

その鵡川河口が前述のようにシギ・チドリをあまり期待できない状況になり、2007年から鵡川河口の秋の１回を減らし、石狩川河口の復活になりました。ただ、石狩川は河口部までとてもきれいになりましたが、浚渫工事のため干潟は出なくなっていたので、ヴィジターセンターから海に出て、砂浜を河口まで、河口からは「はまなすの丘公園」をヴィジターセンターまで歩くという現在のコースになりました。

当初は８月と９月の２回行われていたのですが、残念ながらシギ・チドリにはあまり恵まれず、2013年からは８月の１回だけになりました。その代わりになったのが後述する「いしかり調整池」です。

**【モエレ沼】**

札幌市東区にあるモエレ沼は、ずっと昔に豊平川、石狩川の度重なる氾濫によってできた沼であり、札幌市内から出た大量のゴミの埋立地でしたが、1982年に公園化工事が始まり、2005年に開園となりました。基本設計は世界的に有名な彫刻家イサム・ノグチによるもので、象徴的建物である「ガラスのピラミッド」は探鳥会の集合場所、鳥合わせ場所になっています。

初めて探鳥会が行われたのは公園オープン２年後の2007年４月８日でした。もともと沼の水鳥や草原の鳥が見られるところでした。公園化により草原の鳥はかなり少なくなったのですが、沼は公園化の前とあまり変わらず、春秋の渡りの季節にはカモ類をメインとした水鳥で賑わいます。公園化により沼の外周おより内周道路(堤防道路)が整備され、比較的近い距離でカモ類を見ることができます。

大きな駐車場、立派な建物、そしてある程度整備された自然環境とそこに飛来する鳥たちとその観察。これも探鳥地、探鳥会の一つの在り方かもしれません。

**【いしかり調整池】**

いしかり調整池は2007年に造られた農業用貯水池です。石狩という漢字ではなく「いしかり」が正式名称です。

毎年春に石狩川から水が取り入れられますが、農業のための水需要がなくなる8月下旬に水が抜かれ、大きな底地面の出現となります。あたかも干潟みたいな状態で、これがちょうど秋の渡り時期にあたるので、シギ・チドリ、そして多くの水鳥を見ることができます。

道央において、シギ・チドリ類のある程度の種類、羽数を見られる場所はほとんどなく、今や秋の渡り時期には多くのバードウォッチャーが集まる名所的存在になっています。シギ・チドリ類だけではなく、カモ類、サギ類など、そして水鳥を狙って猛禽類も飛来します。

また、この場所では鳥たちをすぐ近くで見ることができます。コンクリートの壁で囲まれた内側は人間の侵入はありませんから、鳥達に安心感を与えているのかもしれません。

愛護会は池の管理者である石狩土地改良区と提携を結び、池周囲の環境保全、観察者のマナー維持などに貢献しています。ただ、池そのものの状態、たとえば底土に含まれるシギ・チドリ類の餌資源量などは自然に任せることしかできず、将来的な懸念もあります。

写真4. 水を湛えたいしかり調整池とコハクチョウの群れ

**【平和の滝】**

1988年から2011年まで、６月に行われていた夜の探鳥会です。平和の滝は札幌市西区平和にある琴似発寒川の滝で、近くに手稲山登山口があります。

この頃の日の入りは午後７時くらいで、まだ十分に明るい午後６時30分に平和の滝駐車場に集合、登山道を１時間ほど登ったところにあるちょっとした平地まで行きました。途中、薄暮の中の鳥の姿や声、暗くなってからのコノハズクやヨタカの声を聞くものでした。

懐中電灯を持っての、夜ならではの探鳥会でしたが、ヒグマ出没の危険性と駐車場の夜間閉鎖が重なり、2012年は中止、2013年以後は取止めになりました。代替として野幌森林公園で2013年から2015年まで夜の探鳥会が試みられましたが、夜鳴く鳥の声は聴かれず、こちらも取止めとなりました。

以上、かつての東米里と平和の滝を含め、定例となっている探鳥会について書きました。愛護会設立から間もない頃には、愛山渓（上川町）や十勝岳温泉（上富良野町）などでの一泊探鳥会や、張碓海岸（小樽市）や北海道大学苫小牧研究林（苫小牧市）などでの日帰り探鳥会が催されましたが、単発的なもので終わっています。

現在、毎年の行事となっている宿泊探鳥会は愛護会設立30周年を記念して2000年に行われたサロベツ原野・ベニヤ原生花園探鳥会を始まりとしています。宿泊探鳥会については別の機会に書くことになります。

かつて、探鳥はどちらかというと一部の熱心な人たちのものであって、一般的なものではなかったかもしれません。でも時代は随分と変わり、普通の人たちの普通の楽しみになってきました。探鳥会の在り方も時代に合わせていかなければなりません。そのためには50周年がきっと良い機会になることでしょう。

# 探鳥会　私の思い出

## あの頃の懐かしき白鳥園

**小堀　煌治**

1972年（昭和47年）に始まった探鳥会には山スキーを担いで参加したものだ。誰が何時、発案したのか、集合すると、「藤野マナスル登山組」が集まり早速出発、スキーでラッセル、かんじきが後に続き、特に熱心に鳥を観察したわけでもなく、もくもくと登ったように記憶している。通称「六つが池」あたりまで登ると一汗かき、後は気持ちよく滑り降り白鳥園に帰り室内観察組と合流。テーブルには一升瓶が２、３本用意され、しばらく観察した後、お神酒や白鳥園の好意による豚汁をいただき気持ちが和んだところで一人ずつ立って自己紹介と近況報告。最後に小沢広記さんのお話、興が乗って来ると「正調江差追分」まで飛び出した。圧巻だったのは「どろ亀さん」こと高橋延清氏（東大名誉教授）が参加した時。酒好きの氏はワンカップ酒を前に小沢さん（本名鶴吉）との“鶴、亀”漫談が始まり、どろ亀さんの話に皆さん大いに笑い楽しんだ。

白鳥園にはその頃としては珍しい立派なバードテーブルがあり間近にカラ類はもちろんオオアカゲラ、ヤマゲラ、アカゲラ、カケスなどが入れ替わり立ち代わり、コウライキジも深雪の中、オスを先頭にメスを数羽引き連れ堂々と現れた。秋には渡りの途中のオシドリの大群がガチョウの餌を目当てに池に舞い降りた。ミヤマホオジロも毎年ように姿を見せ、イカルやベニマシコ、トラツグミなどの越冬個体も観察された。

さて白鳥園の名前の由来だが、運営する小沢広紀さんは当愛護会の設立発起人で元幹事。本業は農業なのだがこれに飽き足らず早くから「観光農業」を提唱する進取の気性に富む人だった。住宅の裏に大きな池を掘りボートまで浮かべ、白いガチョウを飼っていたので、そこからの命名だった。白鳥園でジンギスカン鍋を提供しイチゴやブドウ狩りを楽しんでもらう、冬は室内から野鳥観察。そんな農業を目指していた。小沢さんは1995年愛護会が設立25周年記念で香港探鳥旅行に出発する前日91歳で逝去された。小沢広記さんと当時道・林政課の斎藤春雄氏（愛護会元副会長）は白鳥園に隣接する「藤沢の沢小鳥の村」の開村に尽力しその後も小鳥の村の活動を支えた。

## 冬の海、鳥を見て居酒屋へ…小樽探鳥会

**戸津　髙保**
**以知子**

私たちは姉に誘われて愛護会に入会してから40年程になります。春、夏、秋と探鳥会を楽しんでいた私たちが「冬の海で探鳥会がある」と知りました。それが何と!!大好きな小樽。驚きと同時に楽しみ一杯で参加しました。当時は小樽駅集合でした。朝早い列車で札幌駅から“車窓探鳥”を楽しみながら行ったことを懐かしく思い出します。

小樽駅で野鳥の会小樽支部の方々と合流し、予め下見をして頂いた情報を聞きながら、バスで一緒に廻りました。

小樽港埠頭では倉庫群の周りに落ちている雑穀目当てのハギマシコの大きな群れを見つけて大歓声が上がったのも心に残る感動でした。そこから祝津漁港、日和山灯台と移動し、いよいよ海の探鳥会です。上から見下ろすと広い広い海の波間に浮いて見えるばかりで、すぐに潜ってしまいます。私はピントもなかなか合わせられず、難しさを感じました。ホオジロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、コオリガモ、シロエリオオハム、ケイマフリ、シノリガモ…名前もなかなか判らず、ただただ一生懸命に海上を探していました。スコープを持っている人たちが声をかけて下さって色々なことを教えてもらい、楽しむことができました。今でも「冬の小樽の海」は大好きな探鳥地です。その後、スコープを買い求めて、今でも私たちの探鳥会のお供として活躍しています。

知人の子どもたち数人を連れて行ったこともありました。目をきらきらさせて図鑑片手に次々と名前を探し、“鳥博士”ぶりを発揮していました。今でもどこかで鳥好きでいるのかな?と海を見ると思い出します。鳥合わせの後には、有志で恒例の喫茶店の「光」、そして居酒屋の「かすべ」で楽しく鳥談義をし、夜汽車でまたまた鳥話しをしながら札幌へ帰ったことを想い出します。北海道野鳥愛護会のますますの発展を願っています。

## 植苗 花と鳥の賑やかな楽園

### 道川　富美子

1982年（昭和57年）６月。いまでも、原野に、草の海が広がる野に立つと、探鳥会に参加し始めた頃の植苗探鳥会が思い出されます。双眼鏡を首にさげて立っている自分の周り、右・左からも後からも鳥たちの声があふれ、一心にさえずる姿を、弧を描いて茂みに飛び込む鳥影を目で追い、エゾノコリンゴの微かな香りを運ぶ風を感じ、そう、夢見心地でした。草原の鳥の魅力を初めて知った時でした。

ウトナイ湖畔へはJR植苗駅から揃って歩き出し、広い道からそれて小さな林を抜け、火山灰混じりの小径を進んだかと思います。おとなしくついて行けば良かったのですが、ヒバリが、カッコウがと何もが珍しく、つい脱線です。野生のスズラン、それも群落を初めて見たのはこのときでした。ちょっと地味なヒメイズイ、花盛りのベニバナイチヤクソウらに見とれて後れを取り、似たような踏み跡がいくつもあって迷いそうになりました。

その先、湖畔には原野が広がっていました。一息ついて耳を澄ますと遠くにさえずりが聞こえ、息をこらしていると近くで突然さえずり始め、目線の先にその姿を見つけたときの嬉しかったこと。その後は望遠鏡を覗かせていただき、次から次、さえずりと姿と名前を繰り返し教わりました。オオジュリンのさえずりは元気に「ビ、ビッチュウ」、コヨシキリはジャズに例えられる賑やかさ、ホオジロとホオアカの聞き分けは無理でした。シマアオジの野を渡る風に乗って細く続く、どこか寂しさを感じさせるそのさえずりは、今となっては幻のさえずりになってしまい、何とも悔しい限りです。

営巣しているコブハクチョウを見たような、オオジシギが急降下していたような気がします。おにぎりはどこで食べたのかなぁ。記憶はぼんやりです。その日のマイ初認（初めて覚えた鳥）記録はシマアオジ、ノビタキ、オオジュリン、コヨシキリ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、ホオアカ、ホオジロ、カルガモ、オオジシギと盛りだくさんでした。

## 多彩な野鳥を楽しむ千歳川

### 白澤　昌彦

千歳川の探鳥地は、「野鳥だより」第37号の「探鳥地案内」で平井さち子さんが「千歳川」を紹介しております。その概要は、バス停「鵜柵舞（うさくまい）橋」からさけます孵化場内を見て、次のバス停「ふ化場前」に至るもので、運が良ければヤマセミ、カワセミ、アカショウビン等にも逢える筈、40～50種は見られる“贅沢な探鳥コース”と紹介しています。初回の担当幹事に平井さんとお付き合いの大変深かった羽田恭子さんの名前がありますので、この方たちの提案で始まったものと思います。

千歳川探鳥会は１泊２日の宿泊探鳥会からスタートしており、初開催は1984年５月19日～20日でした。ただ、第１回目、第２回目は試行的な探鳥会として開催されたようで、私は２回目に初参加しております。宿泊は、千歳市蘭越にあったジンギスカンを提供する「サンポートガーデン」で、前日の夕方に入り、夕暮れ時、アカハラなどの鳴き声を聞いて７時頃からのお酒のある食事、本当に思い出になるジンギスカンでした。食後も、お酒好きが何となく集まり、鳥談義が続き、楽しいお酒でした。翌朝は空が白み始めた朝４時に出発、朝一番の行動は寒さも結構あって中々大変でしたが、鳥が出ると元気になり、現在の集合場所に到着、小休憩後、清流を眺めながらダムサイトを目指しての探鳥、野鳥のさわやかな声を聴き、何か出ないかなという期待感が何ともいえませんでした。

穏やかな陽ざしの中、ダムサイトの高い位置から、サクラを眺めながらの朝ごはん、鳥が来ると食べるのをやめ鳥見が始まるというのどかな時間が何ともいえませんでした。

この探鳥地はいろいろな生息環境の鳥を一度に多数見られるのが一番の楽しみであり、大好きでしたので、栗林幹事と10年間、担当幹事をさせていただき、いろいろな方たちと触れ合うことができたのも思い出の一つとなっております。

## 創立25年 手探りの香港探鳥会

### 佐々木　裕

創立50周年!!速いものです！1995年の香港探鳥旅行は旅行会社に勤める私にとって初めての探鳥企画でした。以前、ガラパゴスツアーに参加した当時の愛護会会長の柳沢信雄さんから『創立25年記念に香港への探鳥旅行を計画したい』との希望がありました。

観光旅行でしか香港を訪れたことが無く、野鳥をよく知らない私は『香港に野鳥？ですかぁ？』と応えたことを今でも覚えています。人が多く賑やか過ぎる香港の中心部しか知らない私には野鳥観察は想像もできないことでした。

しかし、香港の九龍半島北部（中国との国境周辺）には、米埔（マイポ）湿地や大埔滘（タイポウカウ）自然護理區（森林公園）などがあり、探鳥好きの英国人（当時の香港は英国の統治下）がしっかり保護をしていたのです。米埔は中国からの難民が多い場所で、周辺への立ち入りが厳しく制限されており、事前の申請が必要でした。その許可をどうやって取るのか？現地にいろいろ問い合わせをし、ようやく許可を得ることができました。

現地に行ってみると、銃器を持つ監視塔が有り、ソリハシセイタカシギ等が群れる湿地への入り口には鉄条網、そして『感電！』の警告まで！『ここまで来て入れてもらえなかったらどうしよう？』と内心ハラハラしました。許可証の再確認後、鉄条網を越えます。背後で鉄のドアが閉まる音…「無事に戻れるのかなぁ？」という不安。観察小屋へのトレイルは浮かせたドラム缶に板を打ち付けたものでした。足を踏み外すと泥の湿地が要注意です。先端にある観察小屋へ徒歩十数分、残念ながら野鳥観察のピーク時（潮の満ち引きによります）に遅れてしまいました。

それでも、観察小屋からはソリハシセイタカシギをはじめ様々な湿原の野鳥を観察することができました。また、大埔では美しいヒイロサンショウクイやエンビタイヨウチヨウ等を観察することができました。以来、趣味の仕事と揶揄されながら探鳥旅行の企画・実施を致しております。

## 創立30年 初めての原生花園へ

### 横山　加奈子

北海道野鳥愛護会発足30周年の記念行事の一環として、これまでなかった宿泊探鳥会が実施されました。2000年７月１日～２日、サロベツ原野・ベニヤ原生花園でした。この頃の私は、鳥を見始めて３～４年で、草原の鳥はほとんど見たことがありませんでした。サロベツ原野は360度見渡す限りの原野で遮るものがなく、あちこちで鳥の声が聞こえ、時々上空に飛び出す鳥や、低い枝先に止まってさえずる姿が見られました。お目当てのツメナガセキレイ、シマアオジ、ノゴマ、オオジュリン、ノビタキ、ベニマシコなどが見られました。また沼ではアカエリカイツブリも観察出来て皆で大喜びしました。夕食時も自己紹介から始まり楽しいひと時でした。

翌日は早朝探鳥会に参加。開始がより早いと、より多くの鳥が見られると知りました。前夜の盛り上がりで遅かった人も参加し、タフだなと感心。ベニヤ原生花園でもツメナガセキレイをはじめビンズイ、ニュウナイスズメ、未だに区別が難しいセンニュウ類も見られました。草原の旅では、たくさんの花が咲き、集まる虫がいるから鳥が集まってくることを知りました。性別、年齢など関係なく教えてもらいながらの参加が、とても新鮮で嬉しかったです。

もう一つ印象に残っているのは2002年８月31日～９月１日のコムケ湖・能取湖の宿泊探鳥会です。札幌居住なのでシギ・チドリを見る機会はほとんどありませんでした。能取湖では赤く色づいたサンゴ草の間を、人間の目を気にすることなく、エサ探しにあちこち歩きまわっているのに感動しました。双眼鏡を使わずに、肉眼で鳥を追っていく経験はその後もそんなにありません。水鳥はスコープや双眼鏡で見るので、図鑑に13cmと書いてあっても、もう少し大きく思えますが、肉眼で見るとスズメと同じくらいだと納得しました。

その後もこのような感動を味わいたくて、宿泊探鳥会に参加してきました。山の鳥、草原の鳥、海の鳥とたくさん見ることができました。猛禽類やシギ・チドリに詳しい人、鳥の鳴き声で種類がわかる人など、たくさんの人から学ぶことができて、宿泊探鳥会は私の鳥見にとてもプラスになっています。だんだん環境の変化などにより場所の選定が難しくなっていますが、是非続けてほしいと思っています。

## 鳥談義も盛り上がる宿泊探鳥会

**栗林　宏三**

私が宿泊探鳥会に初めて参加したのは、2002年８月31日～９月１日のコムケ湖・能取湖探鳥会です。コムケ湖では、地元で鳥類標識調査をしている大舘和広氏にシギ・チドリのバンティング、プラスチックのフラッグを付けて放鳥する話を聞きました。また、オオタカに襲われ絶命したメダイチドリを手のひらに乗せて見る事ができ、印象に残っています。

能取湖へ移動し、サンゴソウの群生地で木道を歩きながら間近でたくさんのシギ・チドリを夕食時間ぎりぎりまで観察でき大満足でした。

その日の宿の夕食も美味しく、今日見た鳥の話で盛り上がり、楽しいひと時でした。初めての宿泊探鳥会で良かったことは、鳥好き仲間との鳥談義でした。次の日、濤沸湖ではカワセミ、ベニマシコをじっくり見られ、あまりの美しさに時間も忘れ、バスの出発時間が少し遅れたほどでした。昼も子育て中のオジロワシの狩りを見ながらの楽しい食事となりました。

別の宿泊探鳥会で印象に残っているのは、2013年５月３日～５日の天売・焼尻探鳥会です。羽幌港に到着すると、強い風と高波でフェリーが出航するかどうか分からないということで、出航することに望みをかけて、港周辺で鳥を見ながら待つことになりました。しかし、欠航が決まり羽幌町で一泊することになり、幹事の佐々木氏の奮闘努力の甲斐があり、分散でしたが宿が取れ、ひと安心。私も何度か船を利用する旅をしましたが、欠航に遭遇したのは、後にも先にもこれ一度きりです。

翌日、焼尻島はやめて、天売島に向かうことになりました。前日の余波で波が高く、高速船のためすごい揺れに悩まされながらの航海でした。

天売島では待望のヤツガシラを見ることができて、皆さん大満足でした。他に珍しい鳥、３種類が観察されました。カラフトムシクイ、ムジセッカ、ヒメコウテンシです。色々な経験をした楽しい宿泊探鳥会でした。

## いしかり調整池　花壇整備も楽しく

**早坂　泰夫**

いしかり調整池の正面、池へ向かう階段の横に花壇があります。この花壇は、2018年３月に北海道野鳥愛護会と石狩土地改良区とで交わした「いしかり調整池利用にかかわる確認書」に基づいて取り組んでいるものですが、実はこの花壇の整備活動はその２年前の2016年から行われていました。

樋口会長ご夫妻と幹事だった中正憲佶さんご夫妻が花壇を自主的に整備してくださったのが始まりでした。中正さんのご親戚の農家から提供していただいた30数鉢の花苗に樋口会長の庭からの花苗も加え７月上旬に植栽されました。その年の９月の探鳥会では花壇に植えられた色とりどりの花が、探鳥会参加者の目を楽しませてくれました。

次の年の2017年には、50鉢以上の提供をいただき、幹事の松原さんご夫妻もお手伝いに加わり植栽活動が行われました。この活動が引き継がれ、確認書の中にある協力活動の大きな柱になりました。昨年は、石狩土地改良区が用意してくれた約150鉢の花苗と幹事の原さんが持ってきてくださったコスモスの苗等を植えこみました。

2017年に石狩土地改良区との協議がスタートしましたが、愛護会としては、いしかり調整池を秋に飛来する渡り鳥たちの中継地としての役割の維持と野鳥観察の場として永続的に利用させていただく一方で、協力できる活動として花壇の整備や管理棟トイレの清掃・整備、駐車場のマナー向上の啓発などを行うこととしました。

数度にわたって協議を重ね、2018年３月13日に「いしかり調整池利用にかかわる確認書」の調印式が行われました。

今年も６月を迎えると、花壇の整備活動が始まります。そして９月には、秋の渡りのシーズンを迎えます。今年はどんな鳥たちが渡ってくるのか、どんな鳥が見られるのか、期待が膨らみます。

# 2020年度総会報告

日　時：2020年４月15日(水）午後６：00～８：00
場　所：かでる２・７　810Ｂ会議室
　樋口孝城会長挨拶のあと、議長に栗林宏三氏を選出した。審議のうえ、原案通り可決、承認された。

（議事）
１．2019年度事業報告
〔総　務〕
⑴　野鳥写真展の開催
　期　間：2019年５月８日(水)から５月21日(火)
　場　所：エルプラザ１階　情報センター
　出　展：20名　37点
⑵「北海道野鳥だより」の発送「196号～199号」
⑶　野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展
　期　間：2019年６月１日(土)から６月30日(日)
　出　展：20名　37点
⑷　新年講演会・野鳥写真映写会の開催
　日　時：2020年１月11日(土）午後１時30分～４時
　会　場：かでる２・７　520研修室（５F）
　講　師：先崎　啓究・愛子　ご夫妻
　演　題：耳を澄ませば・離島探鳥紹介
　　写真映写会 ４名　参加者 127名(会員外70名)
⑸　北海道野鳥愛護会の名前入りカレンダーの作成･販売
　60部　販売価格1,200円
⑹　定例役員会の開催（毎月１回、計11回）：新型コロナウイルスの影響により、３月の役員会を中止
⑺　傷害保険の更新（対象者 720名　保険料 13,620円）

〔広　報〕
⑴「北海道野鳥だより」の発行「196号～199号」
　（野鳥だより編集委員会）
⑵　北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営
　（ホームページ運営委員会）
⑶　年間予定表配布

〔探　鳥〕
⑴　探鳥会の開催　22回
　（総参加者数720人　１回平均　32.7人）
　（６.16植苗ウトナイ・６.30／７.14野幌森林公園・３.１円山公園・３.15ウトナイ湖の５回中止）
　（お試し室蘭唐松平（16名）を含む）
⑵　宿泊探鳥会　５月17日(金)～19日(日)
　参加者37名（礼文島）
⑶　いしかり調整池環境保全活動
　・６月12日　花壇の植栽
　・７月10日　水やり､追肥､花殻つみなどの花壇整備
　・８月31日・９月８日・10月１日　清掃活動
　・探鳥会開催ポスター・マナー順守ポスターを施設掲示ボードに掲載

〔50周年記念事業〕
　50周年記念事業実行委員会を立ち上げ、５回開催
　記念号（200号の増ページ）・探鳥会観察記録編纂・記念式典・記念探鳥会などを計画

２．2019年決算報告
2019年度決算報告書（別掲の通り）

３．会計監査報告
白澤監事から適正処理の報告があり、承認

４．2020年度事業予定
〔総　務〕
⑴　野鳥写真展の開催
　期　間：2020年５月19日(火)から５月30日(土)
　　午前９時～午後10時（土、日も閲覧）
　場　所：札幌市男女共同参画センター(北区北８西3)
　　エルプラザ１F　情報センター
⑵　野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展
　期　間：2020年６月２日(火)から６月30日(火)
⑶「北海道野鳥だより」の発送「200号～203号」
⑷　新年講演会・野鳥写真映写会の開催
　2021年１月17日(日)
　(50周年記念式典として会場をガーデンパレスで予定)
⑸　北海道野鳥愛護会の名前入りカレンダーの作成･販売
⑹　定例「役員会」の開催（毎月1回、計12回）
⑺　傷害保険の更新
⑻　関連団体との協力（野幌森林公園を守る会など）

〔広　報〕
⑴「北海道野鳥だより」の発行「200号～203号」
　（野鳥だより編集委員会）
⑵　北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営
　（ホームページ運営委員会）
⑶　年間予定表の各施設への配布

〔探　鳥〕
⑴　探鳥会の開催　29回(中止の旭岳宿泊探鳥会含む)
⑵　いしかり調整池環境保全活動
⑶　テストケースとして茨戸川緑地探鳥会を計画

〔50周年記念事業〕
　記念号（200号の増ページ）・探鳥会観察記録編纂・記念式典などを計画

５．2020年度決算報告
2020年度予算書（別掲の通り）

６．2020年度役員人事
　幹事の後藤義民氏（ご逝去）と、今堀魁人氏が退任した。藤吉　功氏が探鳥幹事に就任、広報代表は國本昌秀幹事が就任した。島崎康広幹事、田中冬彦幹事が総務所属となった。

顧　　問　藤巻裕蔵、小堀煌治、戸津髙保
会　　長　樋口孝城
副 会 長　富川　徹、栗林宏三、横山加奈子
監　　事　白澤昌彦、松原寛直
代表幹事　畑　正輔
幹　　事
（総務）◎辻　雅司、品川睦生、竹内　強、中村　隆、畑　正輔（兼）、島崎康広、田中冬彦
（会計）◎横山加奈子（兼）、原　美保、浜野チヱ子
（探鳥）◎早坂泰夫、梅木賢俊、門村徳男、北山政人、佐々木裕、道場　優、鷲田善幸、佐藤ひろみ、富川徹（兼）、臼田　正、栗林宏三（兼）、新城　久、鈴木幸弥、藤吉　功
（広報）◎國本昌秀、樋口孝城（兼）、川路則友、道川富美子、中田達哉
（◎は、各担当の代表者）

# 2019年度　決　算　書

（収入の部）

| 項　目 | 2018年度決算 | 2019年度予算 | 2019年度決算額 | 予算比（▲減） | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 個人会費 | 498,000 | 500,000 | 555,000 | 55,000 | 前納、後納を含む |
| 家族会費 | 177,000 | 174,000 | 189,000 | 15,000 | |
| 団体会費 | 5,000 | 5,000 | 5,000 | 0 | |
| 活動収入 | 196,600 | 200,000 | 218,600 | 18,600 | 講演会・小樽探鳥会参加費、カレンダー売上他 |
| 雑 収 入 | 2,204 | 311 | 3,705 | 3,394 | 利息他 |
| 寄 付 金 | 55,000 | 10,000 | 27,000 | 17,000 | 個人寄付 |
| 小　　計 | 933,804 | 889,311 | 998,305 | 108,994 | |
| | | | | | |
| 繰 越 金 | 321,458 | 295,689 | 295,689 | 0 | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 合　　計 | 1,255,262 | 1,185,000 | 1,293,994 | 108,994 | |

（支出の部）

| 項　目 | 2018年度決算 | 2019年度予算 | 2019年度決算額 | 予算比（▲減） | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 印 刷 費 | 467,486 | 438,000 | 437,475 | ▲525 | 野鳥だより印刷費他 |
| 通 信 費 | 149,394 | 247,000 | 214,616 | ▲32,384 | 会報発送費、切手代、ホームページ維持費 |
| 会 議 費 | 45,000 | 45,000 | 44,500 | ▲500 | 役員会、総会会場費 |
| 活 動 費 | 211,481 | 220,000 | 179,540 | ▲40,460 | 会場費、バス代、カレンダー支払 |
| 消耗品費 | 27,422 | 30,000 | 14,490 | ▲15,510 | インク代、封筒代、用紙代他 |
| 事務所費 | 40,000 | 40,000 | 40,000 | 0 | 事務所費用 |
| 傷害保険費 | 17,440 | 14,000 | 13,620 | ▲380 | 保険代 |
| 雑　　費 | 1,350 | 10,000 | 1,000 | ▲9,000 | 設備利用料他 |
| 予 備 費 | 0 | 141,000 | 0 | ▲141,000 | |
| 基金積立 | 0 | 0 | 0 | | |
| 小　　計 | 959,573 | 1,185,000 | 945,241 | ▲239,759 | |
| 次年度繰越 | 295,689 | 0 | 348,753 | 348,753 | 当年度余剰金 |
| 合　　計 | 1,255,262 | 1,185,000 | 1,293,994 | 108,994 | |

# 2020年度　予　算　書

（収入の部）

| 項　目 | 2020年度予算 | 2019年度決算 | 増　減 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 個人会費 | 530,000 | 555,000 | ▲ 25,000 | 前納、後納を含む |
| 家族会費 | 180,000 | 189,000 | ▲ 9,000 | |
| 団体会費 | 5,000 | 5,000 | 0 | |
| 活動収入 | 200,000 | 218,600 | ▲ 18,600 | 講演会、カレンダー売上、小樽探鳥会 |
| 雑 収 入 | 1,247 | 3,705 | ▲ 2,458 | 利息他 |
| 寄 付 金 | 10,000 | 27,000 | ▲ 17,000 | 個人寄付 |
| 小　　計 | 926,247 | 998,305 | ▲ 72,058 | |
| | | | | |
| 繰 越 金 | 348,753 | 295,689 | 53,064 | |
| | | | | |
| | | | | |
| 合　　計 | 1,275,000 | 1,293,994 | ▲ 18,994 | |

（支出の部）

| 項　目 | 2020年度予算 | 2019年度決算 | 増　減 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 印 刷 費 | 470,000 | 437,475 | 32,525 | 野鳥だより印刷費、封筒印刷費 |
| 通 信 費 | 230,000 | 214,616 | 15,384 | 会報発送費、切手代、ホームページ維持費 |
| 会 議 費 | 44,500 | 44,500 | 0 | 役員会、総会会場費 |
| 活 動 費 | 200,000 | 179,540 | 20,460 | 会場費、バス代、カレンダー代支払他 |
| 消耗品費 | 30,000 | 14,490 | 15,510 | 事務用品他 |
| 事務所費 | 40,000 | 40,000 | 0 | |
| 傷害保険費 | 14,500 | 13,620 | 880 | 保険代 |
| 雑　　費 | 10,000 | 1,000 | 9,000 | 設備利用料他 |
| 予 備 費 | 236,000 | 0 | 236,000 | |
| 基金積立 | 0 | 0 | 0 | |
| 小　　計 | 1,275,000 | 945,241 | 329,759 | |
| 次年度繰越 | 0 | 348,753 | ▲ 348,753 | |
| 合　　計 | 1,275,000 | 1,293,994 | ▲ 18,994 | |

## 積立基金特別会計

（2019年度収入決算）

| 項　　目 | 金　額 |
|---|---|
| 積 立 金 | 600,000 |
| 一般会計より繰入 | 0 |
| 合　　計 | 600,000 |

（2020年度収入予算）

| 項　　目 | 金　額 |
|---|---|
| 積 立 金 | 600,000 |
| 一般会計より繰入 | 0 |
| 合　　計 | 600,000 |

## 会　員　数

| | 2016. 4. 1 | 2017. 4. 1 | 2018. 4. 1 | 2019. 4. 1 | 2020. 4. 1 |
|---|---|---|---|---|---|
| 個　人 | 262名 | 262名 | 274名 | 261名 | 252名 |
| 家　族 | 125名（54家族） | 124名（55家族） | 119名（52家族） | 132名（59家族） | 135名（60家族） |
| 団　体 | 1会員 | 1会員 | 1会員 | 1会員 | 1会員 |
| 合　計 | 388名 | 387名 | 394名 | 394名 | 388名 |

**新型コロナウイルスの影響で、以下の探鳥会は中止しました。（７月～８月の定例探鳥会は炎天下でのマスク着用は、熱中症の危険もあり中止と判断しました）**

| | |
|---|---|
| ・円山公園探鳥会 | 2020. 3. 1 |
| ・ウトナイ湖探鳥会 | 2020. 3. 15 |
| ・モエレ沼探鳥会 | 2020. 4. 12 |
| ・宮島沼探鳥会 | 2020. 4. 19 |
| ・野幌森林公園探鳥会 | 2020. 4. 26 |
| ・藤の沢探鳥会 | 2020. 5. 5 |
| ・野幌森林公園探鳥会 | 2020. 5. 10 |
| ・千歳川探鳥会 | 2020. 5. 17 |
| ・鵡川河口探鳥会 | 2020. 5. 24 |
| ・野幌森林公園探鳥会 | 2020. 5. 31 |
| ・茨戸川緑地お試し探鳥会 | 2020. 6. 6 |
| ・植苗ウトナイ探鳥会 | 2020. 6. 7 |
| ・厚別川探鳥会 | 2020. 6. 14 |
| ・野幌森林公園探鳥会 | 2020. 6. 21 |
| ・福移探鳥会 | 2020. 6. 28 |
| ・野幌森林公園探鳥会 | 2020. 7. 5 |
| ・旭岳宿泊探鳥会 | 2020. 7. 11～12 |
| ・石狩川河口 | 2020. 8. 23 |
| ・鵡川河口 | 2020. 8. 30 |

**新型コロナウイルスの状況により中止の場合があることをご了承下さい。**

**【いしかり調整池】**2020年９月６日(日)

この時期、いしかり調整池にやってくるシギ・チドリを主に観察します。また、水鳥たちを狙って猛禽類もやってきます。調整池の周りでの観察がほとんどで移動はありません。11：30頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気が良ければ管理棟の周りなどで昼食をとります。

**集　合**：いしかり調整池駐車場　9：30
**交　通**：公共の交通機関はありません。

**【野幌森林公園】**2020年９月13日(日)

大沢園地で昼食をとり、大沢口に戻るのは13：00頃になります。

**集　合**：野幌森林公園大沢口　9：00
**交　通**：JRバス　新札幌駅発（文京台循環線）
「文京台南町」下車　徒歩５分
夕鉄バス　新札幌駅発（文京台南町行）
「大沢公園入口」下車　徒歩５分

**【宮島沼】**2020年９月27日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの渡りの中継地として重要な場所です。近年はシジュウカラガンも数を増し、見られる機会が増えてきました。ほかにもハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類も見られます。時には猛禽類が上空に現れ、水面の鳥たちが一斉にざわつくこともあります。湖畔からの観察がほとんどで移動はありません。11：30頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。

天気が良ければ駐車場横で昼食をとることもできます。

**集　合**：湖畔　10：00
**交　通**：中央バス　岩見沢ターミナル発（月形駅行）
または月形駅発（岩見沢駅行）
「大富農協」下車徒歩10分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などお持ちください。
☆問い合わせ　北海道自然保護協会　011－251－5465
10：00～16：00（土日、祝祭日を除く）

## 鳥民だより

**【野鳥写真展】実施中**

**場　所**：野幌森林公園自然ふれあい交流館
**期　間**：2020年６月２日～30日
14人28点を展示しています。

※５月19日～30日（札幌エルプラザ）での野鳥写真展は新型コロナウィルスの影響で中止しました。

**【新しく会員になられた方々】**

**鎌田　要子**（札幌市厚別区）
**福澤　公人**（札幌市手稲区）

〔 北海道野鳥愛護会 〕　年会費　個人 2,000 円、家族 3,000 円（会計年度４月より）　郵便振替　02710－5－18287
〒060－0003　札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル５・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465
HPのアドレス　https://aigokai.org